

博士学位論文

シラーにおける美と崇高
——美的教育と近代的主体形成の問題——

要 旨

論文指導委員

主査：古澤 ゆう子 教授

副査：藤野 寛 教授

副査：岩佐 茂 名誉教授

一橋大学大学院言語社会研究科

LD020011

中村 美智太郎

本論文は、フリードリヒ・シラーの1790年以降の論文における特に美と崇高という二つの概念に着目し、シラーの思想、特に「美的教育」や「美的国家」といった主要な概念をめぐる問題を考察する。本論文の基本的な問題意識は、この時期にシラーが主題としている「美的なるもの」は「非美的なるもの」と少なからず関わっており、シラーの思想においてこの二者の関係はどのように位置付けられるのかというものである。

シラーの理論的著作においては一貫して、二項を対立させ、それら二項の関連付けを目指すという姿勢が見て取れる。1780年までにその思想のうちに二項の対立という図式を獲得していたシラーは、1791年から数年間にわたって、カント研究期に入る。このカント研究期には、主に1790年に出版された『判断力批判』を中心に研究された。1793年の『崇高に関して』でのシラーはまだカントの崇高論に依存している傾向があるにせよ、1793年までにシラーは、「美的なるもの」と「非美的なるもの」という対立する二つの要素の設置とその総合という図式を手に入れたとみなすことができる。これに続く1794年の『カリヤス書簡』と1795年の『美的教育書簡』、さらには1795/96年の『素朴文学と情感文学について』といった一連の理論的な著作はどれも、この図式の展開だとみることができる。だが、同時に、シラーはこの図式を一度崩壊させることを構想していることも明らかにする。それが1801年に出版される『崇高について』で展開される思考である。『美的教育書簡』で構築された調和的な美的なるものとしての世界は、『崇高について』の非美的なるもの世界の観点から刷新される。ただし一度崩壊へともたらされるにしても、この二つの世界同士は緊密な関係を保ち、この二つの世界全体で一つの秩序を構成する。こうした全体性では、「美的なるもの」と「非美的なるもの」、ここでは特に美と崇高の自由な運動性が問題とされている。

以上のようにシラーの思想形成を位置付け、各章ではシラーにおける美と崇高の問題を中心に、次のような議論が展開される。

第一章では、『真理と方法』でなされたガダマーのシラー批判を含む解釈を検討する。ガダマーは、シラーに対して、芸術によって用意されるべき真の道德的で政治的な自由に代わって、美的国家の形成、芸術に関心を抱く社会の形成によって、感覚の世界と道德の世界というカントの二元論が、美的遊戯の自由と芸術作品の調和という考えにみられるような形で克服されたと評価する。その一方で、ガダマーは、美的国家における自由と現実世界における自由の対立という新しい対立に入れられ、さらに美と芸術が我々にもたらす自由は、シラーの主張する美的国家のなかでのみ可能であり、決して現実のなかでは実現されないと批判している。こうした批判をどのように捉えるべきかという問題を考察するために、ガダマーの「陶冶」概念の検討を検討する。ガダマーの「陶冶」は、「陶冶」が自然によって与えられた素質を錬磨する「育成」の意味を捨てずに、それを含みながら、自然的性質から自由になり、普遍性へと高まるものとみなされている。「陶冶」において普遍性へと高まる際に、「像」を自己の内に形成するという特徴がある。この「普遍性への上昇」は「抽象化」によって始めて可能になる。こうした批判を含む議論の検討を通じて、シラー解釈の前提は構成される。

第二章では、ガダマーの主張する現実の「仮象的覆い隠し」としての、また自然という包括的な枠組みそのものを破壊するものとしての芸術の働きについては、ツェレが「二重の美学」として解釈している。この「二重の美学」の立場は、ガダマーが批判するシラーの「美的仮象」の働きに積極的な役割を見いだすものである。この検討を通じて、シラーの美的思考は、バークやカントとは異なり、「非美的なるもの」としての崇高の美学によって、「美的なるもの」と「非美的なるもの」との対置された

図式が塗り替えられ、刷新されることにその本質がある点が示される。しかも、この刷新は、カオス状態として放置されるのではなく、秩序として維持されなければならないものである。こうした検討を通じて、シラーの『美的教育書簡』を中心に展開される美的思想は、彼の崇高論を踏まえなければならないことが明らかになる。その様相は、調和をもたらす美に対して肯定していた精神が、後にその否定へと転じ、崇高によって道德化の可能性を見出すという形で理解されるが、これをシラーの論理に特有にみられる精神形成のあり方に関する思考モデルとして把握する可能性を提示する。これにより、シラーの主張する「美的教育」とは、調和によってだけでなく、崇高によっても特徴づけられる精神の成長プロセスの導きであるとみなすことができる。

第三章では、第一章及び第二章で構成してきたシラー解釈のモデルを前提に、シラーの「美的教育」構想とは何かを明らかにする。第二章で論じたツェレの立場を積極的に評価して、シラーの美的教育論を解釈する。「抽象化」を通じて「普遍性への上昇」が可能となる場合に「美的仮象」は現実の「覆い隠し」となり、調和的世界の枠組みに対する「崩壊」の作用であるという点でガダマーと同じ問題圏にありながら、ツェレはシラーの思想においては美と崇高とが切り離し得ないという見解を示し、シラーの思想における「崩壊」の作用をむしろ肯定的に評価する。だが、ツェレは、この関係性がシラーの美的教育の基盤となっていることまでは踏み込んではいない。これに対して、美と崇高の関係がシラーの「美的教育」構想に不可欠のものであることを主張する。こうしたシラーの「美的教育」の背景には、1788年以降のシラー自身の歴史研究に基づく政治的関心があったこともまた、明らかにする。ここから、シラーにおいて美と崇高の接点の位置に関連付けられる芸術の役割を考察しなければならないこと、そして、その芸術の役割が「運命に対する予防接種」であることを示す。

第四章では、シラーの思想における「二重の美学」を、媒介と移行の働きに着目しながら、二つの自由概念の役割を中心にシラーの思想を構造化することを試みる。『美的教育書簡』において示されているのは、感性的衝動と形式衝動という二つの衝動が第三の衝動としての遊戯衝動を媒介として位置付けられ、神性への道に赴くことが指示されるという構図である。この構図において、両衝動の関連付けを可能にするのは、陶冶された人間のもつ自由(第一の自由)の働きである。『崇高について』では、この媒介の論理としての遊戯衝動に導かれて神性への道が志向され、感性的世界から理性的世界への移行が目指され、感性的世界における出口が、主に恐怖感情によって切り開かれることが示される。この恐怖感情に理性的自律性を対置させる場合、理性的自律性における自由(第二の自由)の働きにより、恐怖感情は克服されるが、この克服は、恐怖感情を快へと転換することでなされることを示す。この自由の働きをもつ感情は『崇高について』において「崇高感情」と表現されているが、この感情の自由の働きが、神性への移行の可能性を開くという構造を導出することを試みる。また、ここには、自由概念が遊戯による「媒介」の働きと、崇高による「移行」の働きとに、二重化される構造があり、この二つの構造は、下部構造と上部構造というように、連続したものとして、捉えることができる点を明らかにする。このように解釈することを通じて、分断された人間存在を水平的に媒介する遊戯衝動を土台としつつ、より高次の神性へと向かう道へと垂直的に架橋する可能性を提示する。

第五章では、シラーにおける自律性の思想を、「二重の美学」との関連から、またモーリッツおよびカントとの思想的関係から、明らかにする。まず『崇高について』における「力」概念に着目し、二重の「力」によって崇高経験が可能となり、この崇高経験において理性の自律性が感情として知覚さ

れるという構造を明らかにする。この構造において、「力」の二重性から自律性の思想が導かれて
いることを確認する。次に、シラーがモーリッツの自立性の理論を受容した点を指摘し、『カリアス書
簡』において提出された美の定義「現象における自由」「現象における自律」を、この観点から再検
討することを試みる。この際、シラーが有機体の例を挙げていることに注目し、さらに、シラーにおけ
る有機体としての国家観を検討する。この検討を通じて、『美的教育書簡』において示される、「機
械的国家」と対立される「有機体的国家」の起源を探る。具体的には、カントが『判断力批判』にお
いて提出している「有機体」と「機械」という対概念を国家観に反映していることに、その起源を求め
られるかどうかを考察する。これらの考察を通じて、崇高と美という「二重の美学」の観点から、シラ
ーの自律性の思想を照射することを試み、シラーの「自律性」の思想と国家論を、近代主観主義美
学に対する批判(ガダマーが行ったような)を乗り越えることが可能であるかという視点から、評価す
る。

第六章では、シラーの思想を Fr. シュレーゲルと比較することによって、「美的革命」として特徴づ
けることを試みる。シュレーゲルとシラーにおける「美的革命」を比較検討することを通じて、分裂の
発見と、再統一への意志がロマン主義的精神を成り立たせていたことが確認される。美的革命を
成し遂げるには、情感詩人の果たす役割が不可欠である点も確認する。ここでは主に、シュレーゲ
ルの「断片」の精神にロマン主義美学の近代性を読み取る。この「近代性」とは、分裂を自覚した上
で目指される統合の原理としての「美的革命の精神」であり、シラーからも抽出できる精神であるこ
とを確認する。

第七章では、第六章で論じられた美的革命の精神と美的国家とを結びつけ、シラーの美的国家
論のもつ役割をさらに探る。『美的教育書簡』がフランス革命の展開に呼応する形で執筆されてい
たことをふまえ、ハーバマスのシラー解釈を取り上げて、シラーの近代的国家批判を検討する。ハー
バマスは、ガダマーとは対照的に、シラーの近代的国家批判に、マルクス等の後の唯物論思想
に先行するという意味で労働の疎外の問題の先取りをみる。この二者の解釈のありようをそれぞれ
検討し、シラーの美的思索は現実世界での革命の失敗を受けて、政治的に産み出されたと考える
イーグルトンの解釈を手がかりに、シラーの「美的国家」概念に美的革命の可能性を探る。イエシュ
ケの議論を参照しつつ、芸術による美的教育によって高貴な性質へと陶冶されることで、近代的な
諸個人は、自らに生じた諸分裂に調和を与えるというシラーの主張を改めて考察する。この考察を
通じて、シラーの美的国家論は、美的革命を目指す点においては決して非現実的な議論ではなく、
新たな近代的主体の形成についての議論であるということを確認する。最後に、『美的教育書
簡』における美的国家が、崇高感情への教育を前提にしたものであり、美的革命の精神を獲得す
る点でもある点を示し、美的革命の実現を目論んだ初期ロマン主義や初期観念論の思想におい
て、そうした志向それ自体の、現実世界に対する意義のありようについて評価する。

第七章までの考察を通じて、本論文は次のことを主張している。まず、シラーにおける独自性は、
これらの二項の関連付けの問題を「教育」という観点から捉えることにある。フランス革命に応答して
構想された「美的国家」構想は『美的教育書簡』のなかに示されている。シラーの美的国家の本質
的な特徴は、諸個人内部の主観的な調和にあるだけでなく、その調和を得た個人が集まり、集団
として存在するという点にもある。調和をもった諸個人が集まった集団としての美的国家は、近代国
家をもたらした様々な分裂に総合・調和をもたらすという役割を与えられている。個人レベルにお
いては、美の刷新を目指す崇高感情の教育が重要な役割を与えられていることも、忘れてはなら

ない。

さらに、美的国家におけるこの役割を含んだ、対立する二つの要素を統合し、自由を獲得しよう
と意志するふるまいはシラーの美的革命と位置付けられる。シラーにおいては、この美的革命を
実現する人間は、自然的人間からその自然的人間という状態を保持したまま道徳的人間へと移行し、
道徳的原理に基づいた道徳的国家をつくることを目指す。このような諸個人とその諸個人によって
構成される美的国家は、美的陶冶によって可能になるとシラーは考えている。カントとは異なり、
シラーにおいては、崇高感情や、美的国家を形成する際に実現されるべき調和は、教育によって可
能になるという発想がある。この点は、シラーに独特のものである。シラーの美的文化とは無限なる
ものへのまなざしの獲得を可能にするものである。これは、シラーにとっては、フランス革命におい
て露になった粗野で横暴な、道徳性に対して「鈍感な種族」に対する批判的な視点から生まれた、
近代的な主体形成の問題である。こうしたことから、シラーの「美的教育」構想とは、政治的な革命
の失敗に対抗し得るような近代的な主体の形成を目指すものであったとみなすことができる。